

海外のエコホテル

1 北欧はエコ先進地域

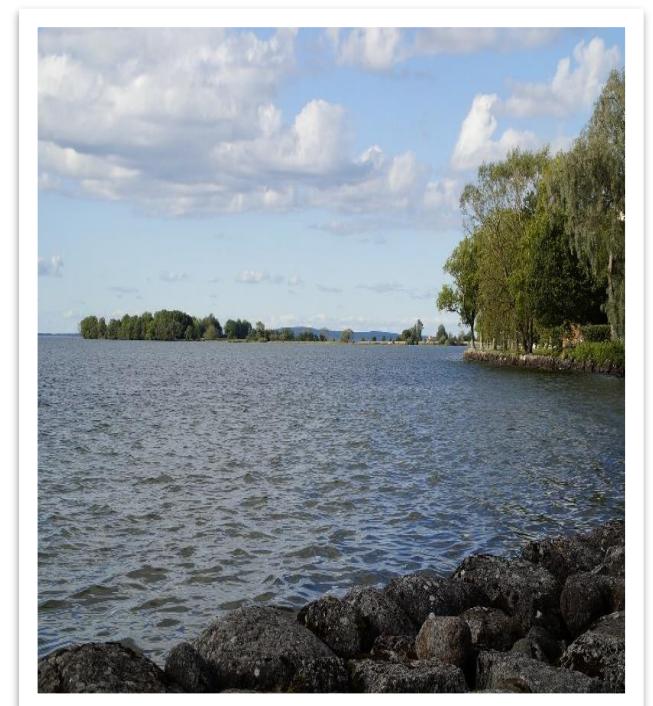
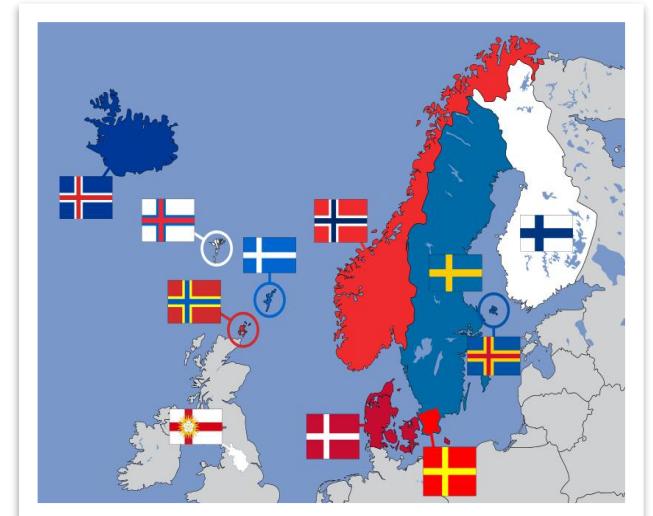
1-1 なぜ北欧がエコ先進国になったのか

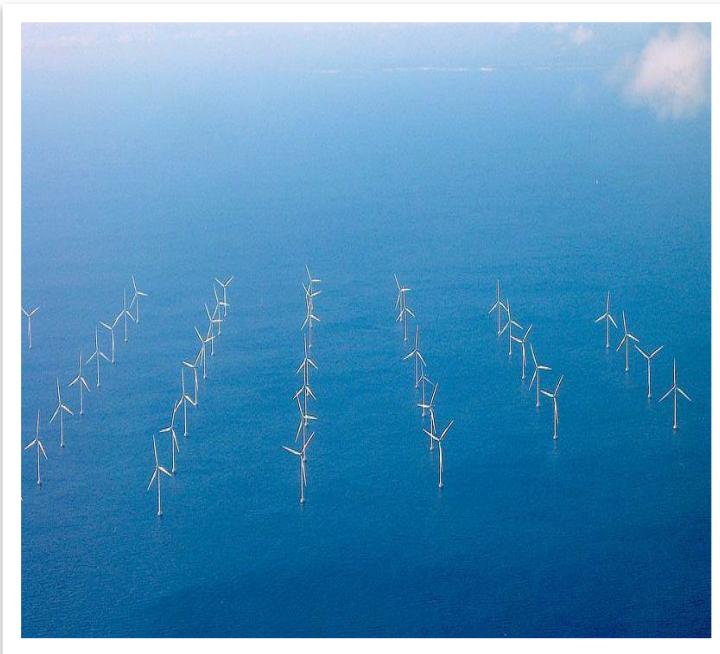
産業革命以降の環境問題が意識されていなかった時代に、工業化が進んだ地域である。

1960年代には各地で酸性雨が降るようになり「環境の酸性化」の論争が始まっている。

北欧の豊富な自然（特に湖）が、酸性雨によって土壌の悪化や樹木の衰退、酸性雨が流入した湖の魚類の減少などの被害を受けた。

これらを国が問題視し環境を守る取り組みを積極的に行うようになり高い意識を持つようになっていった。スウェーデンは1969年に国連環境会議を提唱している。





例えば、デンマークは優れた風力発電の技術を持っている。これは、第一次石油危機が起こるまでデンマークのエネルギー自給率はわずか2%でほとんどを輸入による原油に頼っていた。石油危機以降、政府はエネルギーの多様化を目指した。その一つが当時研究が進められていた風力発電だった。デンマークでは、風の揚力（風が物を押し上げる力）を利用したものが研究され大きな成果を上げ活性化していった。結果的に2017年には消費電力の4割を賄えるようになっている。

他にも

- ・自然を愛する国民性と子供の時から環境教育がよく行われている点。
 - ・北極圏に近いためフロンガスによるオゾン層破壊の被害を大きく受ける点。
 - ・環境税の導入やCO2対策、環境保全に積極的な点。
- などが先進国の要因となっている。



2 北欧が取り組んでいるエコ活動

スウェーデン

・デポジット制の導入

デポジット制とは購入時に製品本来の値段に余分に一定額を預り金（デポジット）として上乗せして販売し、製品の使用後に使用済み製品を所定の場所に返却すれば、購入時に徴収したデポジットの全部もしくは一部を払い戻す（リファンドする）制度。

これにより回収率の上昇や未返却量が分かるので導入後にデポジット額、リファンド額の調整等の制度修正や原因解明ができる。



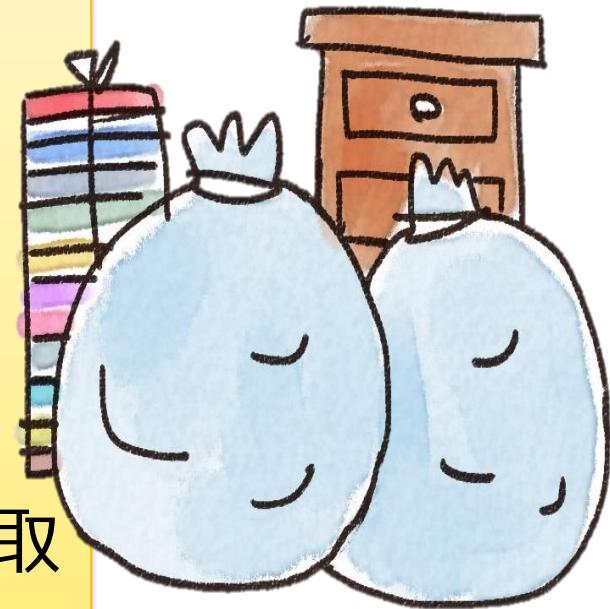
- ・スウェーデン人の環境破壊への危機感と保全への熱意が政府と企業の積極的環境政策を支えている。

→例えば電力料金が発電減に応じて分けられている地域があり最も高いのが風力発電である。風力発電はクリーンな発電減であるがコストが高い。消費者にとってはクリーンでもそうでなくても電力は電力なので利己的に考えれば安いほうを買うが、スウェーデンでは料金が高いクリーンな電力を選ぶ消費者が多い。

デンマーク

- ・風力発電設備設置の場所を農家やその他の地主が提供して設備のオーナーになるというやり方で、風力発電の普及を促している。
- ・建設廃材の埋め立てに高い税金を掛け、埋め立てられる建設廃材の比率は数年間で82%から12%に低下した。
- ・ごみの引き取りの有料化 デンマークのコンペハーゲンでは集団的有料料制を導入。

→地域のごみ収集区ごとにごみ処理コストに応じて料金を取る。



3 海外のエコホテル紹介

ドイツ フライブルク ホテルヴィクトリア

<参考> Earth guardian 2005(8), 44-48, 2005 ヨーロッパ・レポート
ハイテク装備の未来型ホテル



○設備

- ・屋上に太陽光パネルを設置（66㎡のソーラーパネルで16部屋分の電力と温水を供給）
- ・木屑を圧縮加工したペレットを燃料とし63部屋すべての暖房と温水の供給が可能。
- ・照明は80%も消費電力を削減できる特別な電球を使用（トイレやガレージなどは自動スイッチ）。

○食事

- ・朝食時の工夫としてゴミ出さないために使い捨てる容器を全く必用としないビュッフェ形式を採用。
- ・パンに使われる小麦は無漂泊のエコ小麦。
- ・卵は、郊外のエコ農場で遊ばせた地鶏が産んだもの。



○浴室

- ・節水のため新しいタオルに替えたい人は床に使用済みタオルを落としておくようにする（申告制）。
- ・平均2～3泊する宿泊客のうち毎日タオルを交換するのは10%程度→エコの意識が高い証拠。
- ・使い捨て石鹸でなくボトルボディシャンプーを設置。
- ・バスタブに特別なカットが施されていて通常300ℓのところ200ℓで済むつくり。これにより約30%の水とエネルギーを節約できる。

スイス グラウビュンデン州 バイオホテル・ウクリヴァ

<参考> ビオシティ = Bio city
(58), 88-97, 2014 海外取材
欧州中部のバイオホテル探訪



○概要

- ・ スキー場が隣接レジヤーに訪れた観光客が利用するが多い。
- ・ 建材は地域の自然建材を用いており地域の職人の手により施行された。
- ・ 静かな休養地であることを目指していたため室内にテレビやラジオといった電気製品は一切置いていない。

○食事

- ・ 扱う食品は地産地消を基本とし、一早くから有機農家から仕入れ動物にやさしい飼育方法による肉のみを使っている。



○熱エネルギー

- ・ 100平米の太陽熱温水器をセミナーハウスの屋根に設置している。
- ・ 自動運転が可能なチップボイラーを使用。
- ・ 太陽熱温水器からの集熱では足りない熱だけを、チップボイラーがつくる仕組み。
- ・ 業務用冷蔵・冷蔵庫の排熱や、キッチン・浴室・食堂からの廃棄と排水の熱を回収して急騰用水を温めるのに利用している。
- ・ 窓を国産の木サッシによる断熱三層ガラスを窓に交換し、省エネ性能と快適性もグレードアップさせた。

○サービス

- ・ シャンプーやソープ類にはオーガニック。ナチュラルコスメを利用。
- ・ 床や家具、ベッドには地域の無垢のカラマツ材が用いられている。
- ・ ビオの羽毛布団や枕、コットン・リネン類の使用
- ・ 公共交通の利用を推奨→実際に5割の客は利用



4 三カ国のホテルを比較

日本のホテル3件と先ほど紹介したドイツとスイスのホテルを比較した。比較内容は日本各地にあるエコ認定制度を合わせたのエコチェックリストを使用。

大きく4分類に分けたうえで、それぞれのホテルがどの分野に比重を置いているかを模式的に示した（下表）。

比重を置いている分野	日本のエコホテル (15軒)	ドイツのエコホテル リア	スイスのエコホテル クリヴァ
分類1：PR	○		
分類2：施設運営		○	○
分類3：省エネ			○
分類4：排出抑制			○



上記の結果から

- ・日本のホテルは、取り組みをウェブサイト等で発信することや利用者に省エネ・節水などを促すメッセージをホテル内に設置するなど、エコに関するPRを行っているホテルが多かった。
- ・これに対し北欧のホテルでは、環境に配慮された製品を客室に設置することや繰り返し使用することのできないアメニティや製品の使用を控える取り組み、食品廃棄物を減らす取り組みを行うなどの施設を運営する上でのエコ活動に重点をおいているといえる。

○まとめ

今回三カ国のエコホテルを比較しそれぞれ何を中心としているかを比べた。日本と北欧とで結果が変わり、日本はエコを普及するPRが中心であり、北欧は施設を運営する中でエコ活動を行っていた。

サービスを優先するか環境配慮を優先するか、運営上の目的の違いについては、そもそも日本と北欧でのエコに対する認識の違いにあるのではと感じた。日本のエコホテルがサービスを重視する以上、積極的な取り組みは行いづらいただろう。今後、日本全体でエコへの意識がさらに高まったとき、エコホテルの運営目的も変わっていくのか注目したい。